

グローバル社会における共生を考える実践教育

「共生社会実習 B・C・D」

趙 慶姫

《要旨》

「共生社会実習 B」「共生社会実習 C」「共生社会実習 D」は、本学における改組およびカリキュラム改定により、2012年に2学科共通の「現代教養コア科目」第Ⅱ群「共生」に設けられた授業科目である。「共生社会実習」には他に A、E があり、また同じ科目群には「共生社会特別演習」があるが、B・C・D にはアジア、アフリカに関わるという共通点がある。

筆者は C の授業担当者であり、D (1)・D (2) b はツアー引率者として継続して参加しており、B は報告書作成に関わっている。また2015年度からは B・C・D の受講者が青山祭で行なっている合同展示発表を顧問としてサポートしている。その立場から、本研究プロジェクト「共生社会に向けた実践教育の研究」において、これらの科目の記録を担当する。実習はいずれも、授業科目として単位化される前から学生部主催の課外活動として実施されてきた。本稿では、これらの実習が、その誕生から「現代教養コア科目」として回を重ねて発展、進化してきた過程を記録し、今後の展開の参考としたい。

キーワード：共生社会、アジア・アフリカ、ワーク・キャンプ、ワークショップ、スタディ・ツアー

はじめに

「共生社会実習 B・C・D」はいずれも前身のプログラムが学生部¹⁾主催の課外活動としてスタートし、2012年度より授業科目として単位化された。筆者は学生部委員として2008年度以降、課外活動時代に「アジア学院²⁾ワーク・キャンプ」と「カンボジア・スタディ・ツアー」の引率、「国際協力プランナー入門」のコーディネーターを担当し、2012年度からは C「国際協力プランナー入門」の授業担当者となり、D (2) のカンボジア・スタディ・ツアー引率を継続して担当している。また D (1) がカンボジア・サービス・ラーニング・ツアーとして実施された2017年度以降、同様に引率を担当しており、B「アジア学院ワーク・キャンプ」においては学生による記録集作成をサポートしている。アプローチは異な

るものの「グローバル社会における共生を考える」という目的、アジア、アフリカに関わる内容、それらが共通するこの3科目について、本プロジェクトで筆者が研究分担することになったのは、この理由による。

これらの実習科目は、体験学習、PBL (Project-Based Learning 課題解決型学習)、ワークショップ、グループディスカッション、グループワークなどを取り入れたアクティブ・ラーニング型授業であり、その主体的・協働的な学びの重要性、有効性はこれからますます高まると言われている。授業の成果は課外活動時代から実習ごとに作成されている記録集に、あるいは本学広報誌『青山クーリエ』や青山学院の広報誌『青山学報』に掲載されている参加者のレポートがもっとも良く物語っているが、本学が閉学に向かう中で、取り組んできたこれらの実践教育を概観し、その記録をまとめることが必須である。また記録に留めず、その教育プログラムを今後、青山学院の他の設置学校において活用することが望まれる。拙稿がその一端を担うことを願っている。

1. 課外活動としてのスタート

本章では「共生社会実習 B・C・D」の前身である学生部委員会主催の課外活動を記録する。各実習のデータ一覧を稿末に資料として記載している。

1) 特別奨学金の改革

2001年度、本学は青山学院女子短期大学特別奨学金運用の変更を行った。2001年5月23日の教授会に学生部委員会から提案された資料「2001年度青山学院女子短期大学特別奨学金運用の変更について」に、その理由が次のように示されている。

青山学院女子短期大学特別奨学金は、応募および推薦による候補者から奨学生を選考している。この奨学金は、学生の諸活動を支援する奨学金制度として一定の成果を果たしてきた。しかし、「本学の教育方針に基づき、社会・文化の発展に貢献する人材を育成するため」という主旨からすれば、さらに大学としての育成の方向を学生に示しつつ自主性を尊重する運用が必要である。そこで、結果に対する報奨と共に活動への一層の支援に取り組んでいきたい。

この応募による特別奨学金として、2001年度、目的を「学生の意欲を刺激し、本学の教育方針にそうと認められる活動について支援する」とし、「医療・福祉・環境等の分野で活動実績を持つ団体主催の研修プログラムから、本学の教育方針にそうと思われるプログラムを選び、参加費の一部を支給する」「*2001年度の前期は、ACEF (アジアキリスト教教育基金)³⁾のバングラデシュ寺子屋訪問スタディ・ツアーについて奨学生を募集する」という内容で制度が始まった。

この提案のために、2000年9月に学生部委員会の中に給付奨学金の拡充を検討する小委

員会が発足し、いくつかの研修プログラムを調査し、この中に ACEF、YMCA の他に、海外へのスタディ・ツアーも行なっているとしてアジア学院の名前もあがっている。また他大学での取り組みの例として桜美林大学、明治学院大学、立教大学、恵泉女学園大学などの調査を行なっている。研修プログラムについては教職員の参加による調査の必要性から、学生部委員による調査が予定された。

こうして、初年度は ACEF のバングラデシュ・スタディ・ツアーが対象となり、この奨学金から旅費の一部援助を受けた1名の学生が2001年8月に実施されたツアーに参加した。ACEF のツアーが対象になった理由は、それまでも宗教活動センターの呼びかけで学生が毎年参加してきた実績があったことによる。この学生による報告記事が『青山学報198号』に掲載されており、調査のために同ツアーに参加した河見誠学生部委員（当時）も同誌に報告記事を書いている。そこに「こういったプログラムを何らかの形で積極的に教育の中に生かしていくべきだ、と強く感じた。」「この夏に踏み出されたこの小さな一歩が、次のステップに生かされて、多くの学生の成長につながっていくことを願ってやまない。」とある⁴⁾。その後の学生部主催の海外スタディ・ツアー、さらに現代教養コア科目「共生社会実習」として単位化につながる第一歩がここにあったことは間違いないと言えるだろう。

2) 課外活動連続講座の充実拡大

2001年度、21世紀最初の年を国連がボランティア国際年と定めたことを受けて、学生部は従来の様々な課外活動に加え、ボランティアをテーマとする参加・体験型の課外活動連続講座を企画した。

2001年度学生部主催課外活動連続講座「ボランティア・スタディ」

4月から7月、「地球社会時代のボランティア～地球市民としての私たち（講演）」「市民社会とボランティア～その意味と役割（ワークショップ）」「アジア学院でのワーク・キャンプに向けて～ワーク・キャンプ参加までの準備と心構え（ワークショップ）」の3回を学内で、9月12日から14日に「アジア学院ワーク・キャンプ（2泊3日）」、9月17日には再び学内で「これからの私たちの行動を考えよう（ワークショップ）」として連続5回の講座を、講師に桜井高志氏⁵⁾を迎えて行なった。

2002年度学生部主催課外活動連続講座「共に生きる＜自然篇＞」

5・6月に「環境問題とわたしたちの生活について考えよう」「わたくしたちの食べ物はどこから来てどこへ行くのか？」と題したワークショップ、9月には「アジア学院ワーク・キャンプ」と「清里ワーク・キャンプ」⁶⁾をそれぞれ2泊3日で、9月25日に「わたしたちのこれからの活動を考えよう」という振り返りを行なっている。ワーク・キャンプはどちらかに参加として、講師には再び桜井高志氏を迎えた。

2003年度学生部主催課外活動連続講座「共に生きる＜農作業と国際協力篇＞」

引き続き桜井高志氏を講師に、7月18、19日「NGO・国際協力ってなに?」「アジアで

はどんな生活をしているのか」と題したワークショップを、19日にはワーク・キャンプ準備会「日本にある NGO アジア学院を知ろう」を行い、9月9日から12日にワーク・キャンプ、24日にワークショップ「これからの私たちの行動を考えよう」を行なった。

2003年度学生部主催課外活動連続講座「共に生きる＜自然体験篇＞」

7月のワーク・キャンプ準備会、7月末から8月に2泊3日で「牛飼いになろう、清里ワーク・キャンプ」としてキープ自然学校におけるワーク・キャンプ、9月にワークショップ「清里の体験を語ろう」を行なった。

この3年間について、河見誠学生部委員（当時）が課外活動担当として、2003年度の報告書『アジア学院ワーク・キャンプ記録集』⁷⁾に「報告書を出すにあたって－アジア学院ワーク・キャンプの三年間を振り返る」と題して、次のように書いている（「……………」は途中略）。

2001年度は……………企画段階で二つの選択肢の間で迷っていた。一つ目は、ワークショップを何度か行なった後、参加学生が自分で見つけてきたボランティア・ワークを各自で行い、……………というやり方。二つ目は、ワークに関しては、ばらばらの経験をしてくるよりも、皆で共通の作業を体験し、しかも寝食を共にしてその体験を深く共有し合う、というやり方。結局、どちらにするかは学生に委ねようということになった。その結果、後者のスタイルが選択され……………「アジア学院」での2泊3日の農作業をすることに決まった。

アジア学院のワークは「ボランティア」という枠に入りきらない、もっと広い課題を私たちに与えてくれた。言葉にするなら、「共に生きる」ということになろう。……………そこで……………2002年度のテーマを「共に生きる－自然篇」と題することにした。……………しかしアジア学院のワークは学生にとってはかなりハードである。そこで、2002年度は、もう一つ、ワーク体験の選択肢を加えることになった。

これにより「2001年度に迷っていた二つの選択肢を統合する形の連続講座を持つことを目指し」、「学生にも多様な体験・発見のチャンスを与えることができたと思われ」だが、内容、目的がかなり異なる両者を同じ枠で括ることに無理があるとの反省から、2003年度は＜農作業と国際協力篇＞と＜自然体験篇＞に分けることにした、とある。

この後、2013年度まで学生部主催による課外活動連続講座「共に生きる＜農作業と国際協力篇＞」としてアジア学院ワーク・キャンプが、「共に生きる＜自然体験篇＞－牛飼いになろう」として清里ワーク・キャンプが継続されていった。2012年度の新カリキュラムの元にそれぞれ「共生社会実習 B」「共生社会実習 A」として単位化した後も2013年度まで、旧課程の学生のために両者とも学生部主催の課外活動として位置づけられた。清里ワーク・キャンプは2013年度で終了し、2014年度から「共生社会実習 A」は信州共働学

舎での実習になったが、信州共働学舎については本研究プロジェクトで菅野幸恵研究員が担当している。

ちなみに2002年度から始まった課外活動連続講座「沖縄をまなぶ手作りの旅」が生まれた背景には、この年、国際情勢により海外スタディ・ツアーに対する特別奨学金の支給が困難になったことがある。その代わりとなる国内のツアーを企画するのにあたり、「強烈な異文化体験を通して、また開発・発展の（矛盾の）現場を目の当たりにして、自己の振り返りが迫られる」海外の場合と同様の体験が可能な国内の場所として沖縄が選ばれ、かつバングラデシュのような「インパクトの得られる（＝学生が本気で考え、自己を真剣に問い直すきっかけとなりうる）」スタディ・ツアーにするため、既成のプログラムではなく、学生が「自発的かつ自主的に作り上げていくツアー」にすることになったという⁸⁾。

2003年度にはこの沖縄のスタディ・ツアーも課外活動連続講座「共に生きるく平和・環境篇」>」として前述の二つと並んで三篇構成の講座となり、「沖縄を学ぶ旅」と名称を変えて継続し、やはり2012年度の新カリキュラムにおいて「共生社会特別演習」として単位化された。

3) 国際協力プログラムの強化

前述のように ACEF のバングラデシュ・スタディ・ツアーは、2002年度の夏は特別奨学金の支援対象とならなかったが、2003年3月の実施から再開され、その後も同ツアーには学生が参加しており、特に初期は引率というより体験という意味での教員のツアー参加が行われた。

ACEF 以外にも外部団体のスタディ・ツアーに参加した学生に特別奨学金が給付されている。2007年度には NPO 法人「かものはしプロジェクト」主催のカンボジア・スタディ・ツアー、2008年度には Hope Scoop Asia のフィリピン・スタディ・ツアーに参加した学生に対する支援、また JICA 筑波・茨城県国際交流協会共催カンボジア・スタディ・ツアー参加経験を含めた学生生活全般に対する評価としてそれぞれ給付された⁹⁾。2009年度も NPO 法人 ACTION 主催のフィリピン・スタディ・ツアー、社団法人好善社主催のタイ国青少年ワーク・キャンプに参加した学生らが給付を受けている¹⁰⁾。

2008年、これまでの経緯の通り、学生部主催の共生を学ぶプログラムの中心となって推進してきた河見誠学生部委員が学生部長となり、さらにプログラムの強化がはかられていく。本学の学生にとってバングラデシュより参加しやすく、またキリスト教 NGO 以外ということで、新たな海外スタディ・ツアーが検討される。2009年、カンボジアの調査・検討が行われ、2010年度、学生部主催課外活動連続講座「共に生きるくアジア篇」>」として、カンボジア・スタディ・ツアーがスタートした。

2010年度学生部主催課外活動連続講座「共に生きるくアジア篇」>」

11月～1月に3回のワークショップ「講座の概要説明・自己紹介」「カンボジアを知ろう

（学生の発表など）・ツアーの心得」「カンボジアを知ろう（学生の発表）・ツアーの準備」、2月13日から18日のスタディ・ツアー「カンボジアを学ぶ旅」、2月下旬にワークショップ「記録集作成」というプログラムで、募集人数3～6名のところ、学生6名の応募があり、引率教員2名と共に参加した。

プログラムの詳細については次章で述べるが、ここでは、なぜカンボジアなのかについて、河見誠学生部長（当時）が2010年度の記録集に「カンボジア・スタディ・ツアーの三つの目的」と題して述べている中から引用する。

カンボジアは30年前、ポルポト政権による虐殺と圧政を経験しました。外国との戦争ではなく、同胞の間で行われた凄惨な殺戮の歴史は、大きな傷をカンボジアの人々に残しています。……同胞であるが故に「共に生きる」ことの難しさと可能性がその歩みの中にあるでしょう。その一端でもカンボジアに足を踏み入れることによって感じる事ができれば、というのが第一の目的です。

内戦は……大きな傷跡を残しました。しかしこれらの深刻な問題の解決のために、世界の人々が多くの手をさしのべています。日本からも多大な支援がなされてきました。このような、他国に住む人々への支援という形での「共に生きる」実践に直接に触れてみよう、というのが第二の目的です。第三のそして最大の目的は、日本に生きる自分たちの現実に関心をもることなく、自らがアジアとそして世界と「共に生きる」実践に、何らかの一步を踏み出すきっかけを手に入れる、ということにあります。

続いて2011年度には共生ワークショップ「国際協力プランナー入門」が導入される。
2011年度学生部主催課外活動連続講座「共に生きる＜国際協力プランナー入門＞」

9月14・15・16日の3日間、学内でのワークショップ、ゲストスピーカーの話、プロジェクト企画会議に加え、大学近くの国連開発計画 UNDP 事務所見学やフェアトレードショップ訪問を交えたプログラム「YOUPLID」に11名の学生が参加した。

この課外活動の導入は、時間や費用が理由でスタディ・ツアーに参加できない学生のために他のプログラムを、と考えられたことによる。本学の総合科目「平和」を担当されていた ACEF 理事・西村幹子氏、その担当を引き継いだ杉原たみ氏が、国際協力に関わる特定非営利活動法人ジーエルエム・インスティテュート（GLMi）¹¹⁾で「YOUPLID」を開発したメンバーであった。

「YOUPLID」は「You are the Planner for International Development～今日からあなたも国際協力プランナー」というプログラムで、国際協力の経験豊富な GLMi スタッフと同会員がファシリテーターとなって運営される。2011年度に課外活動として導入されたのは、翌年の改組に伴う新カリキュラムを見据えてのことだった。筆者が学生部委員の課外活動担当として本講座を担当し、2012年度に単位化した後も授業担当者となり、学生の活動を見守り、促す役を担った。

2. 現代教養コア科目として単位化

本学は2012年度に改組を行い、それまでの6学科の内、国文学科、英文学科、家政学科、教養学科、芸術学科を統合して2年制の現代教養学科とし、3年制の子ども学科との2学科となり、それに合わせてカリキュラムの改変が行われた。それまで全学共通の「共通教育科目」の中に「主題科目」として、「人文関係科目」「社会科学関係科目」「自然科学関係科目」の三系列および「総合科目」「指定専門教育科目」に分けられていた科目群を、「現代教養コア科目」として、第Ⅰ群「女性と現代（自分を知る）」、第Ⅱ群「共生（他者とつながる）」、第Ⅲ群「表現（発信しコミュニケーションする）」の三つの科目群を設けた。「（改組して誕生した）現代教養学科における教養教育とは、現代に生きる女性にとって必要な人間力の養成であり、現代教養コア科目では（これらの）三つの科目群を通して、その人間力を発揮する基盤となる知識・姿勢・感性・表現力を養っていく」¹²⁾。

この第Ⅱ群「共生」は、共生という概念を理解するための総論的科目、様々な分野にあらわれる共生の在り方を学ぶ各論的科目に加えて、実践的アプローチとして学外に出て行って他者や自然との共生を体験の中で学ぶ実習・演習科目「共生社会実習」「共生社会特別演習」が置かれ、学生部主催の課外活動がこれらの実習・演習科目になった。

本章では各科目の内容と実施状況を記す。

1) 「共生社会実習 B」 アジア学院ワーク・キャンプ

2019年度シラバスより

講義概要

＜ワーク・キャンプを通して共生を考える＞

共生社会実習は、「共に生きる」ためのエートスを実際に体得するための実習である。

共生社会実習 B は、SCF（学生キリスト教友愛会）が企画するアジア学院ワーク・キャンプ参加（8月中旬から下旬のうち三泊四日の予定。農作業、研修学生との交流等。）を中核にして、事前学習、事後の振り返り学習によって構成される。アジア学院は、アジア・アフリカから若者を研修学生として招いて、草の根の「農村指導者」を養成している栃木県那須郡にあるキリスト教 NGO 学校である。

達成目標

「アジア・アフリカとの共生」「自然との共生」に必要なことを体験的に理解し、各自が「共生」に向かって歩む鍵を獲得すること

授業方法

三泊四日のワーク・キャンプを中核にして、準備ワークショップ、事後振り返りワークショップによって構成される。

アジア学院の概要

アジア学院の概要について、同学院のウェブサイトから引用、参照する¹³⁾。

学校法人アジア学院（アジア農村指導者養成専門学校／以下 ARI）は高見敏弘牧師により1973年、鶴川学院農村伝道神学校の東南アジア科を母体として設立された。東南アジア諸国で農村開発に携わっていたキリスト教会とキリスト教団体の要請に応じて、欧米のキリスト教会と援助団体の支援を受けて発足した。

ARI の農村指導者研修プログラムには毎年12～16カ国から25～30人の学生が参加する。アジア・アフリカの最も貧しく取り残された農村共同体からのリーダーを集めており、渡航費、研修費のほぼ全額が支援者・団体の寄付によってまかなわれている。また日本人・外国人の住み込み長期ボランティアが常時10～12名、近隣に住むシニアら通いボランティアが活動に参加している。

いのちを支える「たべもの」作りにこだわり、有機農業による自給自足を基本としており、キャンパスにはコイノニア・ハウス（食堂兼ホール、キッチン）、教室棟、畑・水田、コンポスト（堆肥場）、鶏舎・豚舎、養魚池、寮、チャペルなどが、同学院のフードライフ（いのちとそれを支える食べ物を大事にする生活）の実践のため、農・自然・住が統合された形にデザインされている。キャンパー（数日間滞在し、農作業などのボランティア体験を行う）やビジターが宿泊できる那須セミナーハウスも併設されている。

ARI の特徴である「コミュニティ・ライフ（共同体生活）」についてウェブサイトで次のように紹介されている。

ほとんどのアジア学院コミュニティメンバーはキャンパスで生活しているか、その近くに住んでおり、授業や農業の仕事に全体的に携わっています。食料の栽培や収穫から、調理や食事まで。朝のトイレ掃除当番から、夜のお祈りの時間の誘導まで。それぞれの役割を順番にこなします。共に生活することで、学びの機会を絶えず持つことができ、学びの共同体だと認識しています。異なる文化・人種・宗教的背景を持つ人々と一体となること、共に生活することで、同じ経験を共有し、困難を共に克服し、互いの今を喜び合う。コミュニティでの経験が自己変革を起こすとともに、リーダーシップ育成に大きな役割を果たします。

実習の内容・学生の学び

この ARI で行われる共生社会実習 B のワーク・キャンプはおおよそ次のようなプログラムになっている。

まず7月に学内で行われる事前学習で、稿末の資料にあるように講師を招き ARI について学ぶ。ワーク・キャンプではアジア学院に到着後、初めにオリエンテーション、キャンパスツアーが行われる。キャンパーはセミナーハウスに宿泊し、朝食など、セミナーハウスでとる食事は、主に ARI で生産された食材を用いて自分たちで支度をする。翌日から

ARIの活動に加わり、朝のラジオ体操、朝と夕方の食事の前に行われる1時間程度のフードライフワーク（農作業、家畜の世話）、朝食後のモーニング・ギャザリング（朝の集い）¹⁴⁾をARIのメンバーとともに行う。午前と午後のワークの時間など、研修プログラムの学生が講義を受けていたり、ボランティアやスタッフはそれぞれの仕事に就いているなどのため、キャンパーのみの活動もあるが、ARIのメンバーがコイノニア・ハウスでとる食事にキャンパーも加わったり、キャンパーが夕食を兼ねた交流会を企画してARIのメンバーを招待するなどの交流が行われる。夜はシェアリングの時間を持つ。

この実習から学生たちが学ぶことは、記録集に載っている感想文やそれを元に書かれている『青山学報』の記事などを読むと、主に次のようにまとめられる。

まず学生たちが最も強く感じるのは、食と命についてである。ARIの研修のキーコンセプト「フードライフ」は「食べ物」と「命」は切り離せないということを示すが、学生たちは食べられるために生まれてきた命を目の前にして、自分たちの命は他の生き物の命の犠牲の上に成り立っているということを思い知り、「いただきます、ごちそうさま」という言葉の意味を噛み締める。

次にやはり食に関して、残飯を家畜の餌にし、家畜の糞尿を有機肥料にしている農法を知り、循環型の社会、持続可能な生活が実現していることに驚く。また食べ物が作られるまでに多くの労力がかかること、世界には食糧が不足している国や地域があることを出身の研修生たちから直に聞き、自分たちの食生活を省みて、あらためて食べ物大切さを実感する。

そして、多様な国籍、人種、宗教、文化、考えの人々との共同作業と交流や、シェアリングで意見を出し合い、伝え合うことで考えが深まる体験から、「違い」があることの当たり前、「違い」があるからこそ他者を理解しようとすることに気づく。ARIにおいては、自然と人、人と人が「共に生きる」ことが実践されていること、そのために何が必要なのかをこのワーク・キャンプは考えさせてくれる。



図1：アジア学院 フードライフワーク



図2：アジア学院 フードライフワーク

実習の変遷

ARIは2011年の東日本大震災で建物などが被災し、同年と2013年度はワーク・キャンプを中断した。ちょうど学生部の課外活動から共生社会実習Bに移行する時期で、2014年度から他の実習と同様、企画運営主体も学生部から現代教養コア科目運営委員会に移行した。また同年からSCF（学生キリスト教友愛会）¹⁵⁾主催のキャンプ参加という形をとることになる。これについては、科目担当者として引率した河見誠現代教養コア科目運営委員長がこの年の記録集で次のように述べている。

そして後者（SCF 主催のキャンプ参加という形をとることになったこと：筆者注）によって、このキャンプが、より「共生」を学ぶ内容を充実させるに至った。というのは、SCF キャンプは、本学だけでなく、桜美林大学、新島学園短期大学、そしてSCF 学生という複数ルートの参加者によって構成されており、初めて出会った他大学、他組織の学生たちとの「共生」を余儀なくされるからである。今回のアジア学院ワーク・キャンプは、アジア・アフリカとの共生、自然との共生とともに、初めて出会った者たちとの共生をも実践の中で学ぶ機会となった。果たして、その実りは大きなものであったと言うことができよう。

前述のように筆者は2008年のワーク・キャンプに学生部委員として引率参加して、目が開かれる思いをした。このような環境が東京から数時間の場所にあること、それが寄付によって成り立っていること、その存在そのものが、この日本においては奇跡と言えと感じたが、「奇跡」と言えば、2018年度の記録集の巻頭言のタイトルは「アジア学院が生み出す「奇跡」」（河見誠）である。それによると、東日本大震災の被害によりARIの建物が甚大な被害を受けて途方に暮れていた時、世界中から献金が集まってすべての建物が新しくされたという。まさに奇跡的である。また東日本大震災が引き起こした福島原発事故によりARIは放射能問題に直面し、より徹底的に地球環境問題に向き合うことになる。ARIが徹底的に人と「共に生きる」、自然と「共に生きる」ことでこのような奇跡が生まれ、その奇跡がさらに「共に生きる」輪を広げていく、とこの文章に書かれている。

2019年度は、本学の募集停止により新入生が不在となり、1年生の履修が主となる共生社会実習は開講が危ぶまれたが、共生社会実習Bは、SCFのキャンプ参加という形ゆえに2名の履修で授業が成り立ち、かつ、他大学の学生たちとの交流により実り豊かなものになったということを報告する。

2) 「共生社会実習 C」

2018年度シラバスより

講義概要

＜国際協力への理解を通して共生を考える＞

共生社会実習は「共に生きる」ためのエートスを実際に体得するための実習です。Cは「グローバル社会での共生」を体験的に理解し、国際的な知見を養うとともに、自らが出来ることを参加者同士で議論しながら課題解決能力を身につけることを目指します。実習内容は、国際理解教育に携わっている組織による3日間程度のワークショップへの参加です。今回、対象となるプログラムは、国際協力塾等を展開している NGO の GLMi による「国際協力プランナー入門～今日からあなたも国際協力プランナー」(9月中旬〔夏期休暇期間内〕に、本学内にて開催予定)です。実習の前後にオリエンテーションと振り返りを行います。

達成目標

1. 世界の問題を自分自身との関係で捉えられるようになる
2. 国際協力の仕事について理解する
3. プロジェクトの計画・立案の手法について理解する
4. 課題解決のための議論に積極的に参加できるようになる

授業方法

オリエンテーション、実習、振り返りは主にワークショップ形式で行います。実習ではグループで話し合い、プランの作成、発表を行います。学外見学(大学の近辺)、ゲストスピーカーによる講義やプレゼンテーションも行われる予定です。

授業の内容

共生社会実習 C は、後期授業開始直前の集中講義期間に主に学内にて行われる。前章で課外活動として述べたとおり、授業では GLMi が開発したプログラム「YOUPLID」が行われる。内容はおおよ次のとおりで、年度によって (1) は多少異なる。

(1) 国際協力の取り組みを学ぶ

① NGO 編、②フェアトレード・エシカルブランド編、③国際機関編として、① NGO 編は児童労働の問題に取り組む ACE¹⁶⁾、子ども支援活動を行うセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンなどによるワークショップや講演、②フェアトレード・エシカルブランド編では大学近くのフェアトレードショップ見学や、エシカルブランド VEGANIE¹⁷⁾ の代表・竹迫千晶氏による講演が行われている。③国際機関編ではやはり大学近くにある UNDP、UNICEF、UNHCR などの事務所を訪問して活動紹介のレクチャーを受けるなど、本学ならではの地の利を生かした内容になっている。

(2) プロジェクト企画会議、発表

途上国における教育の問題を取り上げ、「なぜ学校に行けない子ども達がいるんだろう？」という問いの元に、4～5名のグループワークでマインドマップ作成、問題分析、目的分析といったプロセスを経て、問題を解決するためのアクションプランを立てて、発表する。

アクションプランは、自分たちがNGOのメンバーであると仮定して、子どもが学校に行けるようになるためのプロジェクト案を考えるもので、ACEのワークショップで学んだアフリカやインドの事例、ケーススタディの資料を参考に、「場所」「期間」を設定し、具体的な「目標」を立て、その目標達成のための「成果」「活動」を考え、必要な「投入（ヒト・モノ）」、「予算」も設定する。初日・2日目と様々な国際協力の取り組みを学びながらプロジェクト会議を重ね、3日目に自分たちのプランを立てる流れになっている。初めは具体的な活動内容のイメージが持てない学生たちもファシリテーターのアドバイスを受け、徐々にプランをまとめていく。

発表では仮想プロジェクトのみでなく、今、自分たちにできることも述べ、身近なことからアクションを起こせることを確認する。

(3) ゲストスピーカーによる講義

コンゴ民主共和国出身の Willy Toko 氏^[8]の講義は、支援を受ける国の側からの視点に立って、マスメディアが作り出す偏った途上国のイメージ、独裁政権を支援している現状といった問題点を鋭く指摘する。同国がスマホやパソコンに使われているレアメタルを産出しており、それが紛争の元となっているという話は、学生に自分の生活との関わりを気づかせる貴重な機会になっている。

実習の特徴

本実習では、在学中、あるいは卒業後に編入学して GLMi でインターンを務める元履修者が、ファシリテーターに加わり、アイスブレイクの担当、プロジェクト企画会議のアドバイスなどを行なっている。またインターンを経て大学卒業後に実際に国際協力に関わる



図3：プロジェクト企画会議



図4：アクションプラン発表

団体で働いている卒業生が発表を聴きに来るなど、こういった卒業生らが学生にとって、身近なロールモデルになっている。

(1) の①と③から継続しているプログラムを紹介する。

① ACE のワークショップ

授業初日に行うこれらのワークショップは、途上国における児童労働の問題と自らの生活との密接な関わりに気づくことができる内容になっている。

「おいしいチョコレートの真実」

アフリカのガーナはチョコレートの原料のカカオの産地として世界有数で、特に日本に輸入されるカカオ豆の7割はガーナ産である。そのガーナをはじめとする西アフリカのカカオ農家では児童労働が行われている。このワークショップは「チョコレートを通じてカカオ産業の児童労働の現状とわたしたちの生活とのつながりを知り、問題の背景にあるグローバリゼーションや世界貿易の問題について考え、児童労働をなくすための行動を起こしてもらうことを目的に¹⁹⁾」ACE が開発した教材を用いて行う。

「このTシャツはどこからくるの？」

インドのコットン生産現場の児童労働の問題から、身近な衣料の原料栽培、製造、流通を通じてグローバル経済の仕組みを知り、児童労働をなくすための消費行動について考えるワークショップ。ACE が開発した教材はロールプレイなどを取り入れたわかりやすい内容で、特にファッションに関心が高い本学の学生には、このワークショップは児童労働を身近な問題として捉えられる効果が高いようだ。

③ UNHCR 活動紹介

YOUPLID ファシリテーターの杉原たみ氏は国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）職員としてフィリピン、ミャンマー、タイで難民支援に携わった経歴を持つ。本学から歩いて10分程度の距離にある駐日事務所訪問ではゲームや映像視聴などにより難民問題とUNHCR の取り組みについて学ぶが、現場を体験した杉原氏の存在がリアリティを高めていた。

2017、2018年度はUNHCR 訪問に代わり、国連UNHCR 協会によるUNHCR 活動紹介に加え、「いのちの持ち物けんさ」というワークショップが行われた。このワークショップは「難民の人たちの心の痛みに寄り添うために「自分にできることは何か」を考えるきっかけをつくること、また難民について正しく知ってもらうことを目的とし²⁰⁾」ている。このワークショップは同協会のインターンシップを経験した学生を中心に設立された学生団体SOARと協会主催の「大学生×難民支援～学生アイディアコンペ～」にて最優秀アイディア賞を受賞したもので、SOARのプロジェクトの一つとして学生が主体となって進められる²¹⁾。本学でのワークショップも大学生のファシリテーターによって行われ、受講者にとって同年代の学生が難民問題に関わる活動をしているということは刺激になったと思われる。

3) 「共生社会実習 D (1)」

2019年度シラバスより

講義概要

＜共生社会実習 D (1)＞

＜アジアのスタディ・ツアーを通して共生を考える＞

共生社会実習は、「共に生きる」ためのエートスを実際に体得するための実習である。

共生社会実習 D は、国際 NGO 等が企画する国外スタディ・ツアー参加を中核にして、準備ワークショップ、事後振り返りワークショップによって構成される。(なお、D (1) は夏期休暇中、D (2) は冬期休暇中のツアーを対象とする。)

D (1) の対象となるスタディ・ツアーは、ACEF (アジアキリスト教教育基金) 主催・夏期バングラデシュ・スタディ・ツアー (8月上旬～中旬に二週間程度。スラムや農村のノンフォーマル学校に訪問し交流。)、Globe Jungle 主催・カンボジア・サービス・ラーニング・ツアー (8月下旬～9月上旬に10日程度。村のフェアトレード工房で製品共同制作、孤児院でのお手伝いなど。) の予定である。

達成目標

「アジアとの共生」に必要なことを体験的に理解し、各自が「共生」に向かって歩む鍵を獲得すること。

授業方法

国外スタディ・ツアー参加を中核にして、準備ワークショップ、事後振り返りワークショップによって構成される。

ACEF スタディツアー²²⁾

バングラデシュは1971年に独立した当時、アジアの最貧国と言われ識字率は約30%だった(2017年の15歳以上成人識字率72.9%²³⁾)。ACEF はパートナーであるバングラデシュのキリスト教 NGO・BDP²⁴⁾とともに、バングラデシュの6地域で寺子屋(民間の小規模学校)幼稚園、小学校の開設・運営支援を行なっている。BDP の小学校は公立の学校のような年齢制限がなく、就学年齢を越えた子どもも1年次から入学でき、途中で学校をやめた子どもの再入学も可能である。政府から正式に認可されているので、卒業後に公立の上級学校に行くこともできる。1990年、首都ダッカのスラム地区の幼稚園1校163名でスタートした寺子屋は、2015年には幼稚園と小学校合わせて67校、教師数253名、生徒数10,570名と発展した。さらにダッカとブーバイルでは小学校卒業生のために職業訓練学校も開校しており、2校、教師数5名、生徒数89名でそのうち奨学金受給学生(中学生)は33名である。

ACEF は、もう一つの主な活動として、アジアの諸問題に積極的に取り組む青年の育

成のため、1991年8月から年2回、春に1週間、夏に2週間バングラデシュへのスタディ・ツアーを実施している。ツアーでは BDP のスタッフとともに各地の寺子屋学校を訪問して子どもたちと交流する。ツアーの特徴について、隅谷三喜男元 ACEF 会長／元東京女子大学学長は次のように表現している。

ACEF スタディツアーの特徴は、学生が中心ですが、様々な年齢層も加わり、朝夕の礼拝、そして子どもたちなどと遊び、夕礼拝の後でシェアリング（その日にあった事を共に話し合う）をすることです。日本における日常生活では、立ち止まってじっくりと「人生の意味や目的」を先輩の方々と交えて語り合う事など稀ですが、激動のバングラデシュにあって、静かに聖書からの語りかけに耳を傾けながら、語り合い、祈り合いつつ、自らの生き方に思いを馳せる毎日です。本当にすばらしい事です。

BDF 事務局長のアルバート氏（当時）は ACEF 事務局長の井上儀子氏（当時／現 ACEF 理事）とともに、本ツアーが学生部主催の課外活動だった改組前は家政学科選択科目「人間関係論」の「平和－バングラデシュと NGO」の回で、改組後に共生社会実習 D となってからは現代教養コア科目「共生論 A」の「＜世界の子どもたちと共生＞バングラデシュの子どもたち」の回で、講演をされてきた。この講演は受講者以外にも公開され、広く本学の学生の関心を高めた。



図5：寺子屋で国語の授業

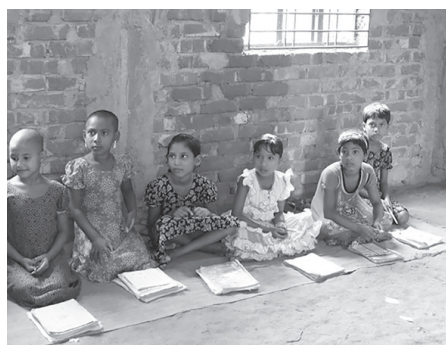


図6：寺子屋で授業中

学生の報告記事から

このスタディ・ツアーに参加した学生の感想を『青山学報』から拾う（引用または要約、補足）。

初めて物乞いに出会い、どうして良いかわからず背をむけ後悔する／物乞いの母子……上目遣いに右手を出す姿を無視するなんて出来ない……目の前にある現実を現実としてはっきり捉えられない自分がいたことは恥ずかしながらまぎれもない事実であった
美しく力強いバングラデシュの景色／広く澄んだ空の下に広がるジュート畑の青と緑

のコントラスト、そこへ日が沈み赤みを帯びてくる美しさと儚さ

粗末な校舎と先生の話に一生懸命耳を傾け、目を輝かせて勉強する子どもたちの姿／黒板をまっすぐ見る眼と、どんなときもたった一本の鉛筆を握りしめて離さない小さな手は絶対に忘れない

バングラデシュと日本を比べることに何の意味があるだろう／何かをすることより、そこに、そばにすることが大切という言葉に出会う／何かをしてあげようという気持ちの中には、自分が上に立って見下ろす傲慢さがあったかも知れない／ネトコロナの緑の田園風景とまったく違う、ダッカのきれいな建物・人と隣り合うスラム・物乞いの格差／どんどん変化し発展していくバングラデシュ。けれどあのいとおしいと感じたバングラデシュはいつまでも変わらないでいてほしいと願うのは日本に住みながらいう私の勝手なのだろうか……／日本にいるときはモノが多くあることは豊かなことだと思っていた。本当の「豊かさ」とは一体何なのだろう……

ここで生活していると人を好きになるまでの時間が早い／すべてが自然のまま、その地に先進国の文化を持ち込んでしまうことは美しいバングラデシュという国を壊すことになるのではないか／人々の国を思う気持ち。……「問題を一つ一つ解決して国に根ざした教育をしていきたい」(BDP スタッフの言葉)／私はいつも自分にはないものばかり数えていた。これからは自分にあるもの、今与えられているものを数えて生きていくことができるようになりたい

4) 「共生社会実習 D (2)」

2019年度シラバスより

講義概要

<共生社会実習 D (2)>

<アジアのスタディ・ツアーを通して共生を考える>

共生社会実習は、「共に生きる」ためのエートスを実際に体得するための実習である。

共生社会実習 D は、国際 NGO 等が企画する国外スタディ・ツアー参加を中核にして、準備ワークショップ、事後振り返りワークショップによって構成される。

D (2) の対象となるツアーは、Globe Jungle 主催・冬期カンボジア・スタディ・ツアーである。(一週間から10日程度。孤児院、日本語学校、村の小学校訪問等を予定)。

達成目標

「アジアとの共生」に必要なことを体験的に理解し、各自が「共生」に向かって歩む鍵を獲得すること。

授業方法

国外スタディ・ツアー参加を中核にして、準備ワークショップ、事後振り返りワークショップによって構成される。

初期のスタディ・ツアー訪問先

前章で述べたように、河見誠学生部委員（当時）が新たな海外スタディ・ツアー先として2009年にカンボジアの調査を行なったが、その際、同行した Michael Shimizu 本学外国人特別非常勤講師の伝手によりフランス系 NGO・PSE、王立プノンペン大学外国語学部英語学科の訪問が行われた。

PSE（Pourun Sourired' Enfant／子どもたちの笑顔のために）はプノンペンのゴミ山でゴミを拾って路上生活していた子どもたちのために設立された教育 NGO。カンボジアで一、二を争う規模で大学まで展開している。2010年度の第1回カンボジア・スタディ・ツアーから訪問し同校生徒との交流を行なってきた。2015年度、2016年度は見学のみの受け入れとなったため、同校教員の紹介によりオーストラリアの NGO から支援を受けて貧困地域の82名（2015年）の子どもたちに教育を提供している CBF（THE CHILDREN FOR BETTER FUTURE）を訪問先に加え、子どもたちとの交流を行なった。

王立プノンペン大学は英語学科からロイ・レスミー日本語学科長の紹介を受け、初訪問となった2010年度のツアーでは6名の学生が、「子から父へ 引き継がれた中田厚仁さんの願い」「カンボジアと日本の結婚式」「カンボジアのお菓子～日本のお菓子との共通点と比較～」「～歴史から未来へ～カンボジアの教育について」「文化と美人の関係」「カンボジア文学」と題したプレゼンテーションを行った。途中、スケジュールの関係で訪問できない年度もあったが、2019年度の夏のツアーまで計6回訪問し、授業参加、ディベートなどで学生との交流を行なった。

2011年度のツアーでは特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター（JVC）の技術学校（車の修理を中心とする）訪問、2012年度は JVC の農村活動、環境教育見学が加わった。前章で述べた特別奨学金の対象となるスタディ・ツアー調査のため、2003年に河見誠学生部委員（当時）が JVC のタイ・スタディ・ツアーに参加したが、その後、このツアーがなくなって対象とならなかったという経緯があった。2011年度のツアーで技術学校訪問、さらにカンボジアの現実を知るには農村を訪れるべきというアドバイスを受けて、2012年度はツアー訪問地にアンコールワット遺跡群の街・シェムリアップが加わったことから、シェムリアップから約60km の距離にあるコンボンクダイ村での JVC の活動を見学することになった。

2010年度に訪問した、若い女性のシェルター活動を行なっている NGO レナセルは、2011年度、日本人スタッフ帰国のため受け入れ対応ができないということだったが、代わりに青山学院評議員でもあった田坂興亜元アジア学院院长の紹介で子どもの人権のための NGO シーライツの現地スタッフである日本人女性のお話を伺う時間を持った。技術学校の説明をされた JVC プノンペン事務所スタッフ、次節で述べる NGO・MAKE THE HEAVEN（Globe Jungle の前身／以下 MAKE）の酒井恵理子さんも含め、2011年度のツアーでカンボジアの NGO で活動する3名の日本人女性と出会ったことは、この年、引率として初めてカンボジアを訪れた筆者自身、強く印象に残ったが、学生たちにとっても貴

重な体験だったに違いない。

NGO・MAKE THE HEAVEN Cambodia／Globe Jungle との出会い

このように様々な訪問先の打診、スケジュール調整、宿泊や交通手段の手配など、自主企画には大変な労力が伴う。課外活動から正課の授業となり、担当する事務部署が変わることもあり、2013年度の悪天候によるツアー中止を機に、2014年度から MAKE のツアーに合流することになった。

2009年の調査で、カンボジアの若い夫婦による NGO・NCCLA (The New Cambodian Children's Life Association) が経営するレストラン「ヴェイヨ・トンレ」で伝統舞踊を踊る孤児たちに出会い、2011年度のツアーで NCCLA の Orphanage (孤児たちの住まい) の訪問が実現する。そこで孤児たちの楽器演奏やダンス披露があり、その中で「よさこい」が踊られたことに驚いた。NCCLA の孤児たちは2006年、2007年に「カンボジアの天使が舞い降りる」と題するジャパンツアーで日本を訪れ、伝統舞踊やダンスの公演を行っていた。2007年以降のジャパンツアーを企画したのが、2006年に MAKE のスタディ・ツアーでカンボジアに出会ったことでスタッフになった、当時まだ20代前半の酒井恵理子さんだった。ちなみに2005年、2010年は同じく MAKE が支援していたバサックスラム²⁵⁾の子どもたちによるジャパンツアーが行われている。この2011年の NCCLA 訪問の際、偶然、酒井恵理子さんに会ったことが本学のカンボジア・スタディ・ツアーを大きく変えることになった。

MAKE のカンボジアプロジェクトは、2005年11月に発起され、カンボジアの子どもたちを支援する活動を続けてきたが、若いカンボジア人の踊りの先生たちが子どもたちに踊りを教えながら生活していた孤児院に出会い、その運営が立ち行かなくなったことを知り、2011年、同プロジェクトが CCMHA 孤児院 (Cambodia's Children Make the heaven Association／くっくま孤児院) として運営を始める。2014年8月にくっくま孤児院の子どもたちによるジャパンツアーが行われ、MAKE のスタディ・ツアーを検討していた河見誠教授が公演を観て、子どもたちが生き生きと心から楽しんでいる様子から MAKE の活動を信頼したことが決定のポイントとなった。

MAKE のカンボジアプロジェクトは2016年10月に独立し、シェムリアップを拠点とする Natural Value (以下 NV) と合併して Globe Jungle (以下 GJ) となる。NV はシェムリアップから約45km の距離にあるスヴァイチュルム村において女性の就労支援を目的とする工房を2014年から開始しており、この合併により、シェムリアップでの活動にアンコールワット遺跡観光の他に、村の訪問が加わった。NV は村の貧困調査も行っており、幹線道路沿いのスヴァイチュルム村からさらに内部に入ったバタカオ村で日本人のグループが掘った井戸を見学するなど、カンボジアの農村部にさらに深く入っていくプログラムになった。また2018年6月、スヴァイチュルム村に GJ のフリースクールが開校され、子どもたちとの交流も行われるようになった。

MAKE THE HEAVEN Cambodia／Globe Jungle のスタディ・ツアー

MAKE／GJ は2005年からスタディ・ツアーを開催している。毎年8月と12月にメインとなるツアーがあり、本学は12月のツアーに合流しているが、その募集チラシのコピーに「人生の宝物を見つけに行く9日間」とある。酒井さんはじめ GJ のスタッフには元ツアー参加者が多いこと、本学の学生もカンボジアのツアーをきっかけに進路を変える者がいることを思うと、「人生」という言葉が決して大げさではないと思える。参加者の年齢層の幅が広く、同 NGO のウェブサイトには「下は生後四ヶ月から上は80代まで」とあるが、2014年度以降に本学が合流した中でも50～60代の社会人、大学生、母親と幼児、小中学生の兄妹、さらには小学校低学年の子どもの一人参加など、多様な参加者と一緒になった。同 NGO の日本支部が大阪にあり関西からの参加者も多い。

同 NGO がくっくま孤児院をはじめ子どもの支援を中心に行なっているのも、内容も子どもとの交流が多いが、本学の要望を入れることにも応じていただき、王立プノンベン大学訪問など、本学学生のためのプログラムも継続できている。また次に述べるクル・クメール訪問は本学の要望だが一般の参加者も希望があれば参加するなど、柔軟に対応していた。

ツアー日程は毎年12月23日～31日と決まっているが、2016年度は学事日程の関係で12月のツアーに参加することができなかったため、2017年2月に本学のためのツアーを組むことになった。多様な世代、背景のツアー参加者との交流がなくなり、また子どもたちとの交流も自分たちだけで準備しなければならなくなる。しかし、その分、自由に企画を組むことができ、日程も1日増やしたことで念願のアキラ地雷博物館²⁶⁾初訪問、2012年度以来のキリングフィールド²⁷⁾、さらに JICA、JETRO 事務所訪問などが実現した。また各訪問先での子どもたちとの交流も学生が各人、責任を持って取り組んだ。2016年度の記録集で授業担当者の河見誠教授が次のように述べている。

このように今回、やむを得ず独自企画のスタディ・ツアーとなったことで、結果として、今までの蓄積すべてを生かした、また学生たちの力が最大限発揮された、現在考えられる限りで最高のツアーとなったと感じている。そのような素晴らしいツアーが実現できたのは、Globe Jungle の酒井恵理子さん、林旅製作所の林真市さんのおかげである。お二人は、次々と申し上げる要望を、決してノーと言わず、「おもしろいですね。トライしてみましょう」と快く引き受けて、一緒になってツアーを作り上げてくださった。お二人には心よりの感謝を申し上げたい。



図7: スヴァイチュルム村のフリースクール



図8: くっくま孤児院 子どもたちによる伝統舞踊

ツアーの特徴

ツアーから特筆すべきプログラムを紹介する。

①プレイ克蘭村

プノンペンから車で約3時間の距離にあるプレイヴェン州プレイ克蘭村に2006年、MAKE のカンボジアプロジェクトが学校を建設。カンボジアはボルボト時代に教育システムが崩壊し、今も学校、教員の数が不足しているため、午前午後の二部制である。経済的に残りの時間に塾や私立学校に通うことができない子どもや、学校までの距離が遠くて通うのが困難な低学年の子どもたちのために、NGO がフリースクールで補習を行なっている。同校は元々カンボジア人が自宅の1階部分で寺子屋を開いていたのを、MAKE が校舎を建て、先生たちを雇い、現在は幼稚園から小学校3年生まで約150名が通う。MAKE/GJ の支援活動「パパママ大作戦」により、毎年子どもたち一人ひとりに衣服や文具などが支給され、食事が不十分な子どもたちのために週に1～2回、お粥給食が行われている。

プレイ克蘭村は最近ようやく電気が通ったが、電気代が高いため夜の照明など使用は最低限で、ガスや水道は通っていない。ツアーでは小学校の敷地の中にある校長先生の自宅にホームステイする。高床式の住まいに蚊帳を張って雑魚寝、風呂の代わりに水浴びをするなど、初めての体験に戸惑う学生も少なくないが、子どもたちが目を輝かせて熱心に勉強し、休み時間には一転、笑顔で走り回って遊ぶ姿から、ツアーの中でも特に学生たちの心に響くプログラムになっている。

②クル・クメール

青山学院大学経営学部卒業の篠田ちひろ氏が、シェムリアップ市内で、カンボジアの伝統医療をベースとするハーブ製品の生産販売、スパ経営を行なっている。学生時代に世界各地を旅行した同氏はカンボジアの国の人々と文化を世界に誇れる物作り、雇用を生み出す目的で起業し、NHK の「アジアで花咲け！なでしこたち」でも紹介された。青山学院での講演会のポスターを目にした河見誠教授が当時の経営学部長、同氏のゼミ担当を通じてコンタクトを取り、ツアーのプログラムにクル・クメール訪問と同氏の講演を組み入れることになった。

学生時代にボランティア団体で途上国の学校づくりを経験し、親に仕事がないと子どもが勉強を続けることができない、支援を持続するにはビジネスにするべきだという信念を持ち、挫折しながらも経営を軌道に乗せた同氏だが、きっかけは学生時代に出会った本だったというエピソードが印象に残る。

洗練された商品のパッケージデザイン、スパや店のインテリア、教育の行き届いたスタッフの様子など、観光都市シェムリアップでこのようなビジネスを展開することの意義の大きさを実感した。

③カンボジアサーカス・ファー

シェムリアップ観光に人気のファーは、内戦時代、タイの国境近くの難民キャンプでフランス人女性が始めた絵画のアートセラピーが起源となっている。それを経験した青年たちが内戦終了後、故郷のカンボジア第二の都市バットアンバンで NPO・Phare Ponleu Selpak (PPS) を設立。当初、内戦のトラウマを乗り越える目的だったのが、子どもたちの才能を伸ばすために音楽やサーカスが加わる。幼稚園児から20代まで約1,000人、貧困、孤児といった様々な背景を抱えている生徒が学校で学んでいる。

サーカスの売上は学校の運営費にあてられ、卒業生に仕事を提供し、またストーリー仕立てのショーはカンボジアの文化を紹介する場になっている。MAKE/GJ のスタディ・ツアーに組み入れられているサーカス鑑賞は、質の高いパフォーマンス、ショーを楽しみながらその背景にあるカンボジアの歴史をあらためて考える機会になる。

2016、2017年度は本学の要望で同法人の日本人スタッフ・池内桃子氏の講演をプログラムに入れることができた。日本でファーの公演を手伝い、大学卒業後カンボジアで日本語教師を経て念願のファーに就職したという同氏のキャリアは、年齢の近い学生たちに強いインパクトを与えただろう。ビジネスを成功させた篠田氏に対して、まだその先が不確定という池内氏は学生にとってより身近な存在だったのではないだろうか。カンボジアに来て、MAKE/GJ スタッフをはじめ、様々な同性の生き方に出会うことが学生たちに与える影響は計り知れない。

5) 「共生社会実習 D (1) b」

2017年度から3)に記載したシラバスのとおり、夏の海外での共生社会実習を D (1) a、D (1) b とし、夏のカンボジアツアーが「サービス・ラーニング・ツアー」として遂行され、2018、2019年度と、8月末～9月上旬に計3回実施された。理由は二つあり、第一にバングラデシュ・スタディ・ツアーが、バングラデシュの情勢のため2年連続して中止になったことがある。第二の理由は、前述のとおりそれまでの2年間で異なり本学学生のためのツアーとなった2016年度のカンボジア・スタディ・ツアーが大きな成果をもたらしたことだった。そこで「スタディ(学ぶ)」からさらに進んで、積極的にカンボジアの社会、人々への「支援(関わる)」に一步踏み出す可能性を追求しようとし²⁸⁾、筆者も D (2) 同様、引率として事前準備から事後まで担当し、深く関わった。

前述のとおり GJ は2016年に NV と合併し、スヴァイチュルム村の工房で水草を用いたバッグなどを製作することで、村の女性たちの雇用を生み出している。クル・クメールの篠田氏の話にもあるように、子どもの教育問題を解決するにはまず家庭の収入の安定が必要であり、女性が経済的に自立し自信を得ることで、自分の子どもの将来に夢を持つことができることから、NV では仕事を早めに終えて文字の読み書きをスタッフが学ぶ「ままなびや」を実施している。本実習ではこの工房の製品開発に学生が携わり、現地の女性、地域と関わることを通して、「サービスすなわち支援（奉仕すること、仕えること）について学ぶ「サービス・ラーニング・ツアー」を組むことにした²⁹⁾」。

さらに本実習は、実習後に開催される青山祭³⁰⁾で学生たちが開発した製品を販売することとして、そこまでの参加を義務付けた。学生たちは青山祭で同年代の学生に訴求する製品を考え、水草製品とアクセサリーをデザインした。ツアー中に工房スタッフによる試作状況を確認、調整を行い、帰国後も工房を担当する GJ スタッフや恵理子さんとやり取りして、製品の完成を待ちながら、パッケージ、チラシづくりなどを積極的に行った。当初、筆者はこうした活動は、工房にとっては時間を取らせる割に得るものが少ないのではと若干不安を持っていたが、製品開発の刺激、スタッフのモチベーションアップになるなどメリットがあるといい、2018年度も同様に NV 工房の製品開発を実習の主な活動とした。

両年とも、シェムリアップが主な活動地となることから、シェムリアップに近いカンボジア第二の都市バタンバンを訪問地に加えた。同市には前述のサーカス学校があることからその見学をプログラムに組み入れ、さらに日本人女性が支援しているという Hope Of Children（ノリア孤児院）を訪問することになった。2年目の2018年度は同孤児院に1泊させていただき、子どもたちとの交流に加え、短時間ではあったが畑の雑草抜きなどの奉仕を行なった。

同孤児院はカンボジアの仏教寺院の施設で、岩田亮子氏が2008年から子どもたちと一緒に生活し、孤児院の運営を行いながら、子どもたちの自立支援の仕組みとして2015年、市内に「カフェHOC」を始めて経営している。カフェでは孤児院で栽培する無農薬野菜を一部使用しており、その使用を100%にすることを目指している。元客室乗務員の同氏は55歳で単身カンボジアに渡ったという。ここでもまた同性の、しかも年齢という壁を軽々と超えた生き方に出会い、筆者自身が感嘆した。

3年目の2019年度は他の実習と同様に開講が危ぶまれたが、ツアー最少催行人数の5名の履修があり遂行された。今回はツアー企画の段階で GJ から従来同様の NV 工房の製品開発と、村の小学校での日本語教師体験という二通りの提案があり、今後、青山学院大学で「サービス・ラーニング・ツアー」を展開する可能性を踏まえて、後者が選択された。ブレイ克蘭村の小学校での活動になり、シェムリアップとプノンペンを拠点とするツアーになった。NV 工房の製品開発では3日間、シェムリアップのホテルから工房に通うスタ

イルが取られたが、この実習ではブレイ克蘭村に3泊4日した。村の生活をほんのわずかではあるが、今までより深く体験することになり、子どもたちとの交わりも深まった。

ここでは今までも度々日本人のインターンシップなどで日本語学習が行われており、全くのゼロからではなく、また恵理子さんや GJ スタッフの通訳も交えながらではあったが、やはり言葉が通じない子どもたちに日本語を教えるのは難しかったようだ。それでも学生たちは日本で作成して持参したカルタ教材や GJ が用意したテキストなどを用いて、45分の授業を午前午後、2コマずつ2日間担当し、貴重な体験を得た。



図9：ブレイ克蘭村で日本語教師体験



図10：Natural Value 工房で製品開発

3. 実習からの展開

1) 「バレンタイン一揆」プロジェクト

2013年度の共生社会実習 C で行われた、ACE の理事・事務局長の白木朋子氏の講義の中で、映画「バレンタイン一揆」の自主上映会を募集しているという話があった。同映画は ACE が設立15周年を記念して2012年に制作したドキュメンタリーで、3人の日本の女子大学生・高校生が ACE の企画でガーナに行き、帰国後、バレンタインの時期にフェアトレードのチョコレートにアピールするアクションを起こすという内容。筆者が本学での上映会実施を履修者に呼びかけ、参加を希望した学生たちにより「バレンタイン一揆」プロジェクトが立ち上がる。学生主体のプロジェクトであったが、上映会は現代教養コア科目運営委員会主催として上映料を実習予算から出し、入場料を無料として12月20日の5限終了後に実施することになった。

さらに上映会 PR を兼ねて、売り上げの一部が ACE の活動支援になるフェアトレードチョコレート製品を販売することにした。11月25日から12月20日まで短大購買会に販売を委託し、最後の1週間は学食の一角に販売コーナーを設け、昼休みは学生が販売を担当した。12月14日に開催された同窓会クリスマス会でも学生による販売が行われ、実習自体と実習から展開した学生の自主的な活動を同窓生に知っていただく機会になり、また多くの同窓会会員による購入で学生たちが励まされた。

やむを得なかったとはいえ年内授業最終日の放課後という日時の設定のため、上映会自体は学生の参加が少なかったが、それに関わらず大きな収穫があったと言えるだろう。授業のレポートでは「共生のためには何が必要か、そのために自分は何をこれからすべきか」を述べることを課しているが、それに対して最も多いのが「知る」「伝える」「小さなことでも自分にできることを実践する」という記述である。このプロジェクトに参加した学生たちは、映画の主人公たちのように、小さくてもアクションを起こすことによってまず自らが変わることを実感したのではないだろうか。

プロジェクトは2014年度も実施され、このうち、チョコレートの販売は2015年度から始まった青山祭での共生社会実習合同展に引き継がれた。

2) 青山祭 共生社会実習合同展

近年、就職活動の早期化が影響してか、短期大学のクラブ活動が年々縮小されており、本学もその傾向から青山祭の出展が減少していた。筆者が学生部委員として青山祭の活性化を図る立場であったことから、また実習の体験を履修者たちが生かす機会を設けるため、2015年に共生社会実習 B・C・D の合同展を学生たちに呼びかけた。学生たちによって出展名が「共生社会実習プロジェクト～Action!! 青短から世界へ～」と名付けられ、教室でのパネル展示、実習の写真のスライドショー上映に加え、ACEF から仕入れたベンガルティーセットでミルクティーを作り、アジア学院のクッキー、前述の ACE のチョコレートなどの食品の販売と、ACEF や MAKE/GJ が扱うアクセサリー、雑貨などフェアトレード製品の販売を行なった。実習で学んだことを伝えるのはもとより、物販を行うことで、わずかながらも実習に関わった NGO の売上に寄与できること、来場者にそれらの NGO の活動を伝えることが、自分たちにできる小さなアクションであることを、学生一人ひとりが自覚して出展に参加した。また現代教養コア科目運営委員会の委員である筆者が顧問となって活動を支援した。

教室だけでは目立たなく集客が難しいという反省から、翌年からは教室での展示と販売に加え、中庭の模擬店でも販売を行い、また発表の時間を設けて実習の内容、自分たちの学びを伝えることに努めた。青山祭の土曜日には受験生を対象とする「進学相談会」が実施されていたので、この展示は短大での特徴ある授業をアピールできることから、進学相談会のプログラムに載せた。

2017年度からは前述のようにカンボジア・サービス・ラーニング・ツアーで開発した製品の販売が同展示の大きな要素になる。この年の受講者にシオン寮³¹⁾生が数名いたことから、学生が開発した製品を寮のクリスマス祝会のプレゼントとしてまとめて購入していただき、学生たちが励まされた。またバングラデシュ・ツアーは中断したもの、ベンガルティーセットの購入、ミルクティー販売利益の寄付などを通して、ACEF の存在・活動を受講者たちも知ることができるよう出展内容を引き継いだ。

青山祭の開催も2019年度が最後になる。3年ぶりに再開されたバングラデシュ・ツアー

の報告・発表も加わって、共生社会実習 B・C・D の締めくくりとなることを期待している。

3) 大学ボランティアセンターとの協働

これら共生社会実習の教育プログラムが本学閉学後に青山学院の設置学校で生かされることを模索して、学内での実施という面でまた日数的にも比較的参加のハードルが低いと思われる共生社会実習 C「国際協力プランナー入門」への参加を、2018年度、大学ボランティアセンター（以下 VC）を通じて大学生に呼びかけた。本実習はワークショップ形式で行うため、他の実習に比べて受講者数が少ないことが大きく影響する。他の実習同様、1年生の受講者が多いため、単独では2019年度の開講が困難であると見込まれており、2019年度を大学と協働で行うことを想定し、そのための試行だった。

大学 VC は、同実習が学生スタッフの国際チームの研修プログラムとして適切であろうとのことで、まず VC 学生スタッフに周知し、その後一般学生に募集をかけた。8名の大学生・大学院生の申込があり、実際には5名（内1名は1日のみ参加）の大学生が、11名の短大生とともに参加した。

2019年度は大学 VC 主催のプログラムとして2日間で行われることになり、短大生はその2日間に合流し、加えて短大生のみで前日に事前学習を行い計3日間とすることになった。VC が公募した大学生とともに、短大生3名が参加する予定である。

おわりに

本稿を執筆している2019年の夏、共生社会実習の B・C・D（1）が本学で最後の開講となる。いくつかの実習は執筆を終える前にすでに終了した。引率経験が1回の B はある程度としても、授業担当者である C や9年間引率を担当してきた D（2）は、その授業の目的、学生が何を学ぶのかを十分に理解しているつもりだった。しかし、今回あらためて、どのように課外活動として始まり、どう授業として展開してきたのかを振り返ると、自分の理解が浅かったことを思い知らされた。この教育プログラムの進化の過程に途中から関わった筆者は、もっと早い時点でそのスタート時の主旨や、変化の度に何が考慮されたのかを深く知るべきだった。終わりになってようやくそのことに気づいたのは残念だが、本学での開講は終わりであっても、おそらく青山学院においてこの教育プログラムは生かされていくだろう。

本研究プロジェクトで、この研究分担を与えられたことに感謝する。

注

- 1) 学生部：学生生活全般の充実と向上を図るため、メンター・アドバイザー制度、健康管理、奨学金、キャリア支援、学友会等学生団体、など学生生活に係る事項を担当する教職員組織
- 2) 学校法人アジア学院（アジア農村指導者養成専門学校 Asian Rural Institute）栃木県那須塩原市
- 3) ACEF (The Asia Christian Education Fund アジアキリスト教教育基金) <http://acef.or.jp/about/> 1990年5月、バングラデシュで初等教育に取り組むキリスト教系 NGO「サンフラワー教育計画＝SEP（現BDP）」を創立したミナ・マラカール女史の呼びかけに応じて、バングラデシュの子どもたちに「寺子屋を贈ろう」と同年10月に発足した。
- 4) 河見誠「スタディ・ツアー参加支援について」『青山学報198号』（2001年12月発行）pp.82,83
- 5) 桜井高志：グローバル教育・開発教育専門家
- 6) 清里ワークキャンプ：清里「キープ協会」で行われる3日間のワークキャンプ。レンジャー（自然案内人）による環境教育を受け、牛飼いの実践を行う。「キープ協会」は米国人ポール・ラッシュ博士によって1938年に建てられたキリスト教指導者研修施設・清泉寮を母体として設立された。
- 7) 『アジア学院ワークキャンプ記録集』（2003年12月発行）
- 8) 河見誠「報告書を出すにあたって－「沖縄を学ぶ手作りの旅」が生まれた背景」『沖縄をまなぶ手作りの旅記録集』（2003年4月発行）
- 9) 『青山学報227号』（2009年3月発行）pp.125-128に河見誠「女子短期大学独自の奨学金制度について」と、学生2名のレポートが掲載されている。
- 10) 『青山学報231号』（2010年3月発行）pp.124-134に学生5名のレポートが掲載されている。
- 11) GLMi：特定非営利活動法人ジーエルエム・インスティテュート 国際協力、開発援助、それらに関わる人材育成に携わる。
- 12) 「現代教養学科設置趣旨」p.7
- 13) アジア学院ウェブサイトより <http://www.ari-edu.org>
- 14) モーニングギャザリングについて、アジア学院ウェブサイトに次のように説明されている。

アジア学院の一つのユニークな特徴として、コミュニティライフ（共同体生活）、あらゆる国の人々との共同生活することが挙げられます。・・・異なるルーツをより深く理解しようとする試みとして、モーニングギャザリング（朝の集い）の時間という瞑想の時間を平日に設けています。40分間のモーニングギャザリングで、長期メンバーは祈りや経験、考えを共有し、アジア学院の研修の基礎は精神的なものにあることを常に心に留めています。このように、アジア学院に来る人々すべてが、精神的な同期や信念を持っていることを期待しています。
- 15) SCF (Student Christian Fellowship 学生キリスト教友愛会)：日本キリスト教団に属する、学生と青少年のためのセンター
- 16) 特定非営利活動法人 ACE：Action against Child Exploitation（意味：子どもの搾取に反対する行動）を団体名とし、児童労働をなくすための活動を行なっている。
- 17) 代表の竹迫千晶氏は広告業界でコピーライター・企画プランナーとしてキャリアを積んで

いく中で、自分のクリエイティビティを社会に活かしたいという思いからエシカルライフスタイルブランド“VEGANIE”を立ち上げ、インドを中心としたものづくり、文化交流を通して女性支援、子ども支援、動物支援を行なっている（2018年度版『YOUPLID 参加者用しおり』より）。

- 18) 来日して14年。2008年、東京大学大学院学際情報学修士号取得。現在、翻訳者、通訳者、ラジオアナウンサーとして精力的に活躍している。また、東京大学大学院学際情報学府博士課程在籍中（2018年度版『YOUPLID 参加者用しおり』より）。
- 19) ACE ウェブサイトより <https://acejapan.ocnk.net/product/189>
- 20) 国連 UNHCR 協会ウェブサイト <https://www.japanfor.unhcr.org/archives/1567/> 「いのちの持ち物けんさ」パンフレットより
- 21) 国連 UNHCR 協会ウェブサイト <https://www.japanfor.unhcr.org/archives/1567/> より
- 22) この項は注25) 以外、ACEF ウェブサイトを参照、引用している。
- 23) 外務省ウェブサイト バングラデシュ人民共和国基礎データより <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bangladesh/data.html>
- 24) ACEF ウェブサイトより <http://acef.or.jp/bdp/> の紹介 / バングラデシュで地域医療に従事してきた Dr. ミナ・マラカル女史が「すべての子どもに読み書きを」を念頭に、1990年5月、ダッカ市南部ジュラインにおいて寺子屋運動を開始し、「サンフラワー教育計画 = Sunflower Education Project = SEP」と名づけた。1999年6月、政府から NGO として正式の認可を受け、名称をBDP (Basic Development Partners) に変更した。
- 25) プノンペンの中心地にあったスラムが強制移住により移転した先のコミュニティで、孤児や親と暮らせない子どもたちが、カンボジア人夫婦のもとで共同生活を行なっている。
- 26) アキラ地雷博物館：カンボジア人アキ・ラー氏はボルボト時代にクメール・ルージュに育てられ少年兵として戦うことを余儀なくされ、敵対するベトナム軍に捕まって以来ベトナム兵となり、さらにベトナム軍と友軍だったカンボジア軍に入れられて内戦時代を過ごす。内戦終結後、自分が地雷を埋めた償いとして個人で地雷撤去に従事、集めた地雷や不発弾を展示し、戦争の悲惨さを訴えている。
- 27) キリングフィールド：ボルボト政権による大量虐殺が行われた刑場跡。カンボジア国内に数百ヶ所あると言われている。ツアーでは、その中でも最大で有名なチュンエク（プノンペンにあった政治犯収容所 S21 = トゥール・スレンに付属して造られた）を訪れた。
- 28) 河見誠「報告書を出すにあたって」『カンボジア・サービスマーケティング・ツアー記録集』（2017年10月発行）より
- 29) 前掲『カンボジア・サービスマーケティング・ツアー記録集』（2017年10月発行）
- 30) 青山祭：10月末から11月初旬の金・土曜日に青山学院大学と同時（大学は金～土）に開催される。
- 31) シオン寮：本学の学生寮。教育寮として毎日の朝拝、週1回の夕拝をまもっている。

資料

共生社会実習 B・C・D 日程・参加者・活動内容リスト

アジア学院ワーク・キャンプ／共生社会実習B

年度	日程		参加者		プログラム名称 講師 主な活動
	ツアー		人数	学科・専攻	
2001年度	9月12日 ～14日	ワークショップ 4月11日(講演) 6月1日 7月19日 9月17日	講師1名 学生12名 教員1名 職員1名	国文2名(2年) 英文4名(1年1名,2年3名) 家政4名(2年) 児童1名(2年) 教養1名(2年)	課外活動連続講座「ボランティア・スタディ」 講師:桜井高志氏(グローバル教育・開発教育専門家)
2002年度	9月10日 ～12日	ワークショップ 5月15日 6月26日 9月25日	講師1名 学生16名 卒業生1名 教員1名 職員2名	国文5名(1年3名,2年2名) 英文5名(1年1名,2年4名) 家政5名(1年1名,2年4名) 教養1名(1年)	課外活動連続講座「共に生きる<自然篇>」 講師:桜井高志氏
2003年度	9月9日 ～12日	ワークショップ 7月18日 7月19日 9月24日	講師1名 学生6名 卒業生1名 教員1名 職員2名	英文2名(1年1名,2年1名) 家政3名(2年) 児童2名(1年)	課外活動連続講座「共に生きる<農作業と国際協力篇>」 講師:桜井高志氏
2004年度	7月29日 ～31日	ワークショップ 7月23日 7月24日 9月17日	学生18名 教員2名 職員1名	英文(1年12名,2年6名)	課外活動連続講座「共に生きる<農作業と国際協力篇>」 ワークショップ講師:遠藤抱一氏(アジア学院副理事長) 桜井高志氏
2005年度	9月6日 ～8日	ワークショップ 7月25日 7月26日 9月16日	学生12名 教員2名 職員1名		課外活動連続講座「共に生きる<農作業と国際協力篇>」 ワークショップ講師:遠藤抱一氏、桜井高志氏
2006年度	9月6日 ～8日	ワークショップ 7月24日 7月25日 9月15日	学生23名 教員3名 職員1名		課外活動連続講座「共に生きる<農作業と国際協力篇>」 ワークショップ講師:遠藤抱一氏、桜井高志氏
2007年度	9月11日 ～13日	ワークショップ 7月25日 9月25日	学生18名 教員3名 職員1名	国文1名 英文3名 家政3名 教養2名 子ども3名 児童教育専攻5名 教養専攻1名	課外活動連続講座「共に生きる<農作業と国際協力篇>」 ワークショップ講師:遠藤抱一氏、桜井高志氏
2008年度	9月2日 ～4日	ワークショップ 7月25日 9月24日	学生11名 教員2名 職員1名		課外活動連続講座「共に生きる<農作業と国際協力篇>」 ワークショップ講師:遠藤抱一氏、桜井高志氏
2009年度	8月31日 ～9月2日	ワークショップ 7月23日 9月14日	学生21名 教員2名 職員1名	国文1名(2年) 英文10名(1年5名,2年5名) 家政3名(1年1名,2年2名) 教養5名(1年) 子ども2名(2年)	課外活動連続講座「共に生きる<農作業と国際協力篇>」 ワークショップ講師:遠藤抱一氏、桜井高志氏
2010年度	9月1日 ～3日	ワークショップ 7月23日 9月21日	学生9名 教員2名	英文4名 家政3名 教養2名	課外活動連続講座「共に生きる<農作業と国際協力篇>」 ワークショップ講師:遠藤抱一氏、桜井高志氏
2012年度	9月6日 ～8日	ワークショップ 8月3日 9月下旬	学生3名 教員2名	教養1名(2年) 子ども2名(1年)	課外活動連続講座「共に生きる<農作業と国際協力篇>」 共生社会実習B
2014年度	8月20日 ～23日	事前学習 8月1日 事後振り返りの会 9月23日	学生9名 教員1名	子ども2名(2年) 国際6名(1年3名,2年3名) 人間社会1名(1年)	共生社会実習B SCF主催アジア学院ワークキャンプ 事前学習指導:遠藤抱一氏 野田沢氏(SCF主事・本学講師)
2015年度	8月25日 ～28日	事前学習 7月4日 事後振り返りの会 9月22日	学生9名 卒業生1名※ 学生1名※ 教員2名	日本1名(1年) 国際3名(1年2,2年1名) 人間社会5名(1年4名,2年1名) ※人間社会1名(2年)と卒業生 はSCFとして参加	共生社会実習B SCF主催アジア学院ワークキャンプ 事前学習指導:遠藤抱一氏
2016年度	8月23日 ～26日	事前学習 7月30日 事後振り返りの会 9月14日	学生6名 教員3名	子ども1名(3年) 国際5名(1年4名,2年1名)	共生社会実習B SCF主催アジア学院ワークキャンプ 事前学習指導:遠藤抱一氏
2017年度	8月22日 ～25日	事前学習 7月7日 事後振り返りの会 9月20日	学生8名 教員3名	日本1名(1年) 国際3名(1年) 人間社会4名(1年)	共生社会実習B SCF主催アジア学院ワークキャンプ 事前学習指導:山下崇氏(アジア学院スタッフ)、野田沢氏
2018年度	8月21日 ～24日	事前学習 7月7日 事後振り返りの会 9月20日	学生7名 教員2名	国際5名(1年) 人間社会2名(2年)	共生社会実習B SCF主催アジア学院ワークキャンプ 事前学習指導:山下崇氏、野田沢氏
2019年度	8月20日 ～23日	事前学習 7月20日 事後振り返りの会 9月21日	学生2名 教員1名	人間社会2名(2年)	共生社会実習B SCF主催アジア学院ワークキャンプ 事前学習指導:野田沢氏

国際協力プランナー入門／共生社会実習C					
年度	日程		参加者		プログラム名称 主な内容(下線は学外の会場)
	実習		人数	学科・専攻	
2011年度	9月14日 ～16日		学生11名	英文8名(1年5名,2年3名) 教養3名(1年)	課外活動連続講座「共に生きるく国際協力プランナー入門」 ・ワークショップ「おいしいチョコレートの真実」 ・プロジェクト企画会議→アクションプラン発表 ～なぜ学校に行けない子ども達がいるんだらう～ ・国際協力の取り組み (ACEのお話、UNDP・フェアトレードショップ訪問) ・ゲストスピーカー(ウィリー・トコ氏)のお話
2012年度	9月13日 ～15日	資料をあらかじめ 配付	学生14名	子ども1名(1年) 日本2名(1年) 国際2名(1年) 人間社会4名(1年) 英文2名(2年)※ 家政2名(2年)※ 教養1名(2年)※ ※2年生は課外活動	課外活動連続講座「共に生きるく国際協力プランナー入門」 共生社会実習C ・ワークショップ「おいしいチョコレートの真実」 ・プロジェクト企画会議→アクションプラン発表 ・国際協力の取り組み (ACEのお話、UNCEF・フェアトレードショップ訪問) ・ゲストスピーカーのお話
2013年度	9月12日 ～14日	資料、事前学習 シートをあらかじめ 配付	学生14名	国際10名(1年8名,2年2名) 人間社会4名(1年)	共生社会実習C ・ワークショップ「おいしいチョコレートの真実」 ・プロジェクト企画会議→アクションプラン発表 ・国際協力の取り組み (ACEのお話、UNHCR・フェアトレードショップ訪問) ・国際NGOによる国内での取り組み(セーブザチルドレンのお話) ・ゲストスピーカーのお話
2014年度	9月11日 ～13日	事前学習 7月30日 事後学習 9月22日	学生16名	日本1名(1年) 国際15名(1年13名,2年2名)	共生社会実習C ・ワークショップ「おいしいチョコレートの真実」 ・プロジェクト企画会議→アクションプラン発表 ・国際協力の取り組み (ACEのお話、UNHCRのDVD視聴、フェアトレードショップ訪問) ・国際NGOによる国内での取り組み(セーブザチルドレンのお話) ・ゲストスピーカーのお話
2015年度	9月10日 ～12日	事前学習 7月14日 事後学習 9月21日	学生12名	子ども1名(2年) 日本2名(1年1名,2年1名) 国際5名(1年4名,2年1名) 人間社会5名(1年4名,2年1名)	共生社会実習C ・ワークショップ「おいしいチョコレートの真実」 ・プロジェクト企画会議→アクションプラン発表 ・国際協力の取り組み (ACEのお話、UNHCR訪問、エンカルブランドVEGANIEのお話) ・国際NGOによる国内での取り組み(セーブザチルドレンのお話) ・ゲストスピーカーのお話
2016年度	9月7日 ～9日	事前学習 7月19日 事後学習 9月20日	学生17名	日本1名(1年) 国際12名(1年10名,2年2名) 人間社会3名(1年2名,2年1名) 現代教養専攻1名	共生社会実習C ※7日の会場:JICA「地球ひろば」(市ヶ谷) ・ワークショップ「このTシャツはどこからくるの？」 ・プロジェクト企画会議→アクションプラン発表 ・国際協力の取り組み (ACEのお話、UNHCR訪問、MOTHER HOUSE見学) ・国際NGOによる国内での取り組み(セーブザチルドレンのお話) ・ゲストスピーカーのお話
2017年度	9月6日 ～8日	事前学習 7月19日 事後学習 9月19日	学生14名	日本3名(1年1名,2年2名) 国際11名(1年10名,2年1名)	共生社会実習C ・ワークショップ「このTシャツはどこからくるの？」 ・プロジェクト企画会議→アクションプラン発表 ・国際協力の取り組み(ACE、エンカルブランドVEGANIEのお話、 UNHCR協会によるワークショップとお話) ・国際協力のキャリアってなんだろう？ ・ゲストスピーカーのお話
2018年度	9月12日 ～14日	事前学習 7月18日 事後学習 9月25日	学生11名	子ども1名(1年) 日本3名(1年) 国際6名(1年3名,2年3名) 現代教養専攻1名	共生社会実習C 「国際協力プランナー入門」ワークショップ(大学生対象) ・ワークショップ「おいしいチョコレートの真実」 ・プロジェクト企画会議→アクションプラン発表 ・国際協力の取り組み(ACE、エンカルブランドVEGANIE、 人道支援JFPのお話、UNHCR協会によるワークショップとお話) ・国際協力のキャリアについて ・ゲストスピーカーのお話
2019年度	9月17日 ～19日	ガイダンス 7月16日 事後学習 9月25日	学生3名 卒業生1名	国際2名(2年) 多元文化専攻1名(1年生)	共生社会実習C 「国際協力プランナー入門」(大学ボランティアセンター主催) ※18・19日は大学VC主催のプログラム(会場:大学)に参加 ・ワークショップ「おいしいチョコレートの真実」 ・プロジェクト企画会議→アクションプラン発表 ・国際協力の取り組み ・ゲストスピーカーのお話

バングラデシュ・スタディ・ツアー／共生社会実習D(1)a

年度	日程		参加者		プログラム名称 訪問地
	ツアー		人数	学科・専攻	
2001年度	8月10日 ～24日		学生1名 教員1名	英文1名(2年)	第21回ACEFバングラデシュ寺子屋訪問スタディツアー ダッカ、ブーバイル、カティラ、ジャマルプール 現地のキリスト教系NGO・BDPが設置した学校の訪問
2002年度	3月1日 ～9日 (2003年)		学生3名 教員1名	国文1名(1年) 児童1名(2年) 家政1名(2年)	第24回ACEFスタディツアー バングラデシュ寺子屋訪問 ブーバイル、ネトロコナ、ジャマルプール
2003年度	3月12日 ～19日 (2004年)		学生1名 教員1名	教養1名(2年)	第26回ACEFスタディツアー バングラデシュ寺子屋訪問 ブーバイル、ネトロコナ、ボクシガンジ
2004年度	3月12日 ～19日 (2005年)		学生1名	国文1名(1年)	第28回ACEFバングラデシュスタディツアー ブーバイル、ボクシガンジ
2005年度	8月5日 ～19日		学生1名 教員1名	英文1名(2年)	第29回ACEFバングラデシュスタディツアー ダッカ、ブーバイル、カティラ、ネトロコナ
2006年度	8月4日 ～18日		学生4名	英文1名(2年) 教養2名(2年) 家政1名(1年)	第31回ACEFバングラデシュスタディツアー ブーバイル、カティラ、ジャマルプール
2007年度	8月2日 ～17日		教員1名		第33回ACEFバングラデシュスタディツアー ブーバイル
2008年度	8月7日 ～21日		学生3名	英文2名(2年) 教養1名(2年)	第35回ACEFスタディツアー ブーバイル、ネトロコナ、カティラ、ジャマルプール
2009年度	8月6日 ～20日		学生2名	英文1名(1年) 教養1名(1年)	第37回ACEFスタディツアー ブーバイル、ネトロコナ、ジャマルプール
2010年度	7月28日 ～8月9日		学生1名	教養1名	第39回ACEFスタディツアー ダッカ、ブーバイル、カティラ、ジャマルプール
	3月20日 ～29日 (2011年)		学生5名 教員1名	英文1名(1年) 子ども4名(2年)	第40回ACEFスタディツアー ブーバイル、ネトロコナ
2011年度	8月8日 ～22日		学生2名	英文2名(1年1名,2年1名)	第41回ACEFスタディツアー ブーバイル、ネトロコナ、ボクシガンジ、ジャマルプール
2012年度	8月3日 ～15日		学生2名	国際1名(1年生) 英文1名(2年生)	共生社会実習D(1) 第43回ACEFスタディツアー ブーバイル、カティラ、ジャマルプール、ボクシガンジ
2013年度	8月14日 ～27日		教員1名		第45回ACEFスタディツアー ブーバイル、ネトロコナ、ポリシャル
2014年度	8月5日 ～19日		学生6名 卒業生1名	子ども1名(2年生) 国際専攻2名(1年生) 人間社会専攻3名(1年生)	共生社会実習D(1) 第47回ACEFスタディツアー ブーバイル、ネトロコナ、ジャマルプール、ボクシガンジ
2015年度	8月5日 ～19日		学生4名	国際専攻2名(2年生)※ 人間社会2名(1年生1名,2年生1名) ※1名は2回目のため課外参加	共生社会実習D(1) 第49回ACEFスタディツアー ブーバイル、カティラ、ネトロコナ、ジャマルプール
2019年度	8月9日 ～20日		学生3名 教員1名	子ども1名(2年1名) 子ども学専攻2名	共生社会実習D(1)a 第57回ACEFスタディツアー ダッカ、ブーバイル、ジャマルプール

カンボジア・サービス・ラーニング・ツアー／共生社会実習D(1)b

年度	日程		参加者		プログラム名称 訪問地・主な活動
	ツアー		人数	学科・専攻	
2017年度	8月27日 ～9月4日	事前学習会 6月13日,27日 7月11日,8月3日 事後学習会 9月14日	学生13名 卒業生1名 教員2名	子ども1名(2年) 日本1名(1名) 国際9名(1年8名,2年1名) 人間社会2名(1年)	共生社会実習D(1)b Globe Jungle主催カンボジア・サービス・ラーニング・ツアー シェムリアップ、バットタンバン ・Natural Value工房で製品づくり、ショップの手伝い ・工房とフリースクールで日本語教師ボランティア ・スヴァイチュム村の小学校でミニ運動会 ・クルクメール篠田さんのお話・ノリア孤児院 ・カンボジアサーカス池内さんのお話、サーカス学校の見学 ・アンコールワット・アキラ地蔵博物館
2018年度	8月26日 ～9月4日	事前学習会 6月12日,26日 7月10日,31日 事後学習会 9月20日	学生8名 教員2名	子ども2名(1年1名,2年1名) 日本4名(1年3名,2年1名) 国際1名(1年) 人間社会1名(1年)	共生社会実習D(1)b Globe Jungle主催カンボジア・サービス・ラーニング・ツアー シェムリアップ、バットタンバン ・Natural Value工房で製品づくり、ショップの手伝い ・ノリア孤児院・GJマングーススクールで運動会 ・クルクメール篠田さんのお話・ノリア孤児院 ・カンボジアサーカス池内さんのお話、サーカス学校の見学 ・アンコールワット
2019年度	8月25日 ～9月3日	事前学習会 5月27日 6月11日,25日 7月10日,31日 事後学習会 9月18日	学生5名 教員2名	日本3名(2年) 人間社会1名(2年) 多元文化専攻1名(1年)	共生社会実習D(1)b Globe Jungle主催カンボジア・サービス・ラーニング・ツアー シェムリアップ、フノンベン ・ブレイクラン村コナツツスクールで日本語教師 ・クルクメール篠田さんのお話・カンボジアサーカス ・アンコールワット・トウールスレン博物館・くつろみ孤児院 ・王立フノンベン大学ディスカッション

カンボジア・スタディ・ツアー／共生社会実習D(2)

年度	日程		参加者		
	ツアー		人数	学科・専攻	
2010年度	2月13日 ～18日 (2011年)	ワークショップ 11月24日,12月14日 1月26日 2月下旬	学生6名 教員2名	英文4名(2年2名,1年2名) 家政1名(1年) 子ども1名(1年)	課外活動連続講座「共に生きるくアジア篇」 ・フノンペン ・NGO PSE・NGO レナセール ・トゥールスレン博物館・キリングフィールド ・王立フノンペン大学でプレゼンテーション
2011年度	2月11日 ～16日 (2012年)	ワークショップ 11月25日,12月9日 1月13日 2月22日	学生6名 (抽選) 教員2名	国文1名(2年) 英文1名(1年) 家政1名(1年) 教養2名(1年1名,2年1名) 芸術1名(2年)	課外活動連続講座「共に生きるくアジア篇」 ・フノンペン ・PSE・トゥールスレン博物館・キリングフィールド ・NCCLA孤児院・王立フノンペン大学 ・JVC技術学校・AAR車椅子工房
2012年度	2月10日 ～16日 (2013年)	ワークショップ 11月4日,18日 1月8日 2月20日	学生8名 教員2名	日本1名(1年) 国際4名(1年) 人間社会2名(1年) 家政1名(2年)※ ※2年生は課外活動	課外活動連続講座「共に生きるくアジア篇」 共生社会実習D(2) ・シェムリアップ、フノンペン ・アンコールワット・戦争博物館 ・JVCの農村活動、環境教育見学 ・トゥールスレン博物館・PSE・NCCLA孤児院 ・キリングフィールド・王立フノンペン大学
2013年度	2月9日 ～15日 (2014年)	ワークショップ 12月3日,17日 1月7日 集まり 2月12日	学生6名 教員2名	日本1名(1年) 国際2名(1年) 人間社会3名(1年2名,2年1名) ※大雪のため中止	共生社会実習D(2)
2014年度	12月23日 ～31日	事前学習会 11月4日,25日 12月2日 事後学習会 1月26日	学生9名 教員2名	子ども1名(2年) 日本2名(1年) 国際6名(1年1名,2年5名)	共生社会実習D(2) Make the Heaven主催カンボジア・スタディ・ツアー ・シェムリアップ、フノンペン ・アンコールワット・クルクメール篠田さんのお話 ・カンボジアサーカス・ブレイクラン村 ・トゥールスレン博物館・タヤマ日本語学校 ・バサックスラム・くっくま孤児院
2015年度	12月23日 ～31日	事前学習会 11月10日 12月2日,8日 事後学習会 1月26日	学生17名 教員2名	子ども2名(1年) 日本3名(1年1名,2年2名) 国際10名(1年8名,2年2名) 人間社会2名(1年)	共生社会実習D(2) Make the Heaven主催カンボジア・スタディ・ツアー ・シェムリアップ、フノンペン ・アンコールワット・クルクメール篠田さんのお話 ・カンボジアサーカス・ブレイクラン村 ・トゥールスレン博物館・タヤマ日本語学校 ・バサックスラム・くっくま孤児院・NGO CBF・PSE
2016年度	2月8日 ～17日 (2017年)	事前学習会 11月8日,29日 12月13日,1月31日 事後学習会 3月1日	学生17名 教員2名	子ども3名(1年2名,3年1名) 国際12名(1年10名,2年2名) 人間社会2名(1年1名,2年1名)	共生社会実習D(2) Globe Jungle主催カンボジア・スタディ・ツアー ・シェムリアップ、フノンペン ・アンコールワット・クルクメール篠田さんのお話 ・カンボジアサーカス池内さんのお話 ・Natural Value工房・アキラ地雷博物館 ・トゥールスレン博物館・キリングフィールド ・タヤマ日本語学校・王立フノンペン大学 ・バサックスラム・くっくま孤児院・ブレイクラン村 ・JETRO・JICA・CBF・PSE
2017年度	12月23日 ～31日	事前学習会 10月24日,11月21日 12月5日,12日 事後学習会 1月24日	学生20名 教員2名	子ども2名(1年) 日本3名(1年) 国際10名(1年9名,2年1名) 人間社会5名(1年)	共生社会実習D(2) Globe Jungle主催カンボジア・スタディ・ツアー ・シェムリアップ、フノンペン ・アンコールワット・クルクメール篠田さんのお話 ・カンボジアサーカス池内さんのお話 ・Natural Value工房 ・トゥールスレン博物館・タヤマ日本語学校 ・バサックスラム・くっくま孤児院・ブレイクラン村 ・王立フノンペン大学でディベート
2018年度	12月23日 ～31日	事前学習会 10月30日 11月13日,27日 12月11日 事後学習会 1月29日	学生15名 教員2名	子ども2名(1年1名,2年1名) 日本1名(1年) 国際5名(1年4名,2年1名) 人間社会7名(1年)	共生社会実習D(2) Globe Jungle主催カンボジア・スタディ・ツアー ・シェムリアップ、フノンペン ・アンコールワット・クルクメール篠田さんのお話 ・トンレサップ湖クルージング・カンボジアサーカス ・Natural Value工房・ガテン系ボランティアワーク ・トゥールスレン博物館・くっくま孤児院 ・タヤマ日本語学校でプチ授業 ・ブレイクラン村・グロジャンフェスタでダンス披露
2019年度	12月23日 ～31日 (予定)	事前学習会(予定) 10月29日 11月19日,26日 12月17日 事後学習会(予定) 1月28日	学生7名 教員2名	子ども2名(2年) 国際3名(2年) 人間社会1名(2年) 多元文化専攻1名(1年)	共生社会実習D(2) Globe Jungle主催カンボジア・スタディ・ツアー ・シェムリアップ、フノンペン ・アンコールワット・トンレサップ湖クルージング ・Natural Value工房・マンゴースクール訪問 ・トゥールスレン博物館・くっくま孤児院 ・ブレイクラン村・ココナッツスクールで運動会 ・日本語学校訪問

Social Harmony Practicum B, C, D: Practical education on social harmony in a global society

Kyong Hee CHO

Social Harmony Practicum B, Social Harmony Practicum C, and Social Harmony Practicum D are courses in Group II: Coexistence, within the Contemporary Liberal Arts Core Curriculum, which in 2012 is common to two departments due to the reorganization of the university and revisions to the curriculum. Social Harmony Practicum also has A and E, and Seminar in Social Harmony is part of the same group of subjects. However, B, C, and D are all related to Asia and Africa.

The author is an instructor for C, continues to participate as a tour leader for D (1) and D (2) b, and is involved in preparing reports for B. Since FY2015, students of B, C, and D have been acting as advisors to support joint exhibition announcements at the Aoyama Festival. I am in charge of recording these subjects in the “Research on Practical Education for Social Harmony” research project. All of the practical training has been conducted as an extracurricular activity organized by the Student Affairs Department since before it was credited as a course subject. In this article, I would like to record the process by which this practicum has gone through repeated developments and evolutions from its origins to its place today in the Contemporary Liberal Arts Core Curriculum in the hope that it may serve as a reference for future developments.

Keywords : Social Harmony, Asia • Africa, work camp, workshop, study tour
